

美術2・3 オリエンテーション, 学習を支える資料

ページ	掲載の意図	活用方法
オリエンテーション 表紙 長沢芦雪「虎図襖」 デザインバーコード	○表紙は、長沢芦雪の「虎図襖」を選んだ。芦雪のダイナミックな筆使いを感じ取れるよう、部分を大きく掲載した。 ○裏表紙には、教科書の中にある作品から発想された、ユーモアのあるデザインバーコードを載せている。 ○表紙・裏表紙を最大限に活用して、鑑賞活動を深めてもらいたい。	○虎の顔部分を大きく掲載しているため、かすれや濃淡といった墨の表現をじっくり味わうことができる。教科書P.22～23の題材「墨で描く楽しさ」と関連させるとよいだろう。 ○デザインバーコードが、何をもとにデザインされたか生徒に問いかけ、関連した作品を探す活動を通して、教科書全体を一度鑑賞させるとよいだろう。
P.2～4 うつくしい！	○第2・3学年の始まりは、谷川俊太郎の文「うつくしい！」と、「阿修羅像」で構成した。巻頭「うつくしい！」の文をきっかけにして、「阿修羅像」の造形を鑑賞し、感じたことなどを他者と意見交換し、見方や感じ方を深めることも経験させたい。	○「阿修羅像」は、生徒にとって、鑑賞する際の観点が多い。三つの顔の表情や6本の腕の向き、手が示す形などから、「どうしてこんな表情をしているのだろう」「手の形はどんな意味があるのだろう」など、疑問に思ったことを他者と意見交換させ、見方や感じ方を深めるとよいだろう。
P.76～77 【発想・構想】 発想を広げる	○作品をつくるうえで、発想を広げることにつまずく生徒も多い。絵や彫刻、デザインや工芸などの表現分野に限らず活用できる、汎用性の高い発想方法を複数掲載した。	○発想の過程でつまずく生徒には、適宜このページを参照させたい。特にデザインの題材では発想を広げる手立てとして有効に活用できる。 ○グループでの話し合いでは、漫然と話し合いをするのではなく、教科書に掲載しているような仕掛けを加えると、より話し合いを深めることができる。
P.78～79 【映像メディアの活用】 写真や映像を撮影する	○写真や映像を用いてあらわすために、コンパクトデジタルカメラやデジタルビデオカメラ、タブレット端末の基本的な扱い方を掲載した。また動画の原理を学ばせるため、ソーマトロープとパラパラ漫画を紹介している。	○映像メディアは、それ自体で作品をつくるだけでなく、さまざまな題材の中で活用することができる。タブレット端末など手軽に撮影できる機器を使い、完成した作品を写真や映像に残すなど、積極的に利用したい。
P.80～81 【映像メディアの活用】 映像で広がる世界	○映像機器の技術は日々進歩しており、拡張現実(AR)やプロジェクションマッピングなどを生かしたさまざまな作品が生まれている。ここでは、そうした作品の一部を掲載した。	○プロジェクションマッピングは、さまざまな場所のイベントでも活用され、身近になってきている。教科書掲載作品以外にも、映像メディアを使った作品を調べさせ、どんなところにおもしろさや美しさがあるのか考えさせたい。
P.82 【つくるための材料と用具】 金属でつくる	○金属の種類と特徴の他、授業で扱いやすい金属である針金と金属板を取り上げ、切る、曲げる、打ち出すといった金属の基本的な技法を掲載した。	○実際にどんな場所でどんな種類の金属が使われているのか、教科書を参考に調べさせるのもよいだろう。種類の違いによる金属の特徴を考えさせたい。 ○金属を加工する際には、手順や用具の使い方などをしっかり指導して、安全に作業ができるように配慮する必要がある。教科書紙面や二次元コードにリンクした動画などを活用し、丁寧に指導したい。
P.83 【つくるための材料と用具】 石でつくる	○石による表現の幅を感じ取れるよう、石を使った作品を複数掲載した。また、授業で扱いやすい活動の提案として、てん刻の技法を紹介している。	○石の加工の例として、てん刻づくりを掲載しているが、印面のデザインを絵文字の題材と関連させたり、持ち手を持ちやすくデザインさせたり、彫刻作品として取り組ませたりなど、さまざまな授業に発展させることができる。印刀で怪我をしないよう、十分に注意を促しながら指導したい。
P.84～85 【つくるための材料と用具】 材料の可能性	○紙や粘土、木、金属、石などの他にも、身の回りのさまざまな材料を用いて作品をあらわすことができる。ここでは、廃材や布、糸などを使った作品の例を掲載した。生徒自身があらわす際にも、多様な材料に目を向けさせ、その可能性を感じ取ってもらいたい。	○廃材でも、作品づくりに活用することで、新しい価値をもたせることができる。掲載作品を鑑賞することで、廃材のもつ、材料としての可能性を感じてもらいたい。また、作者がなぜその材料を使って作品をつくったのかも考えさせたい。 ○布を使って空間をいろどった作品や、刺繍を施してシャツに新しい価値をもたせた作品などを鑑賞し、布や糸の、材料としての魅力を感じ取らせたい。
P.86～87 【色の世界】 色を組み合わせる	○二つ以上の色を組み合わせる配色について学習する資料である。トーンの種類図のほか、見えやすい色の組み合わせや、色の配置と面積による効果などを解説している。	○トーンの効果は、表現の活動だけでなく、デザインを鑑賞する題材などでも有効に活用できる。教科書掲載の「病院の壁の絵」などを参考に、与える印象や伝えたい内容とトーンの間を関係を考えさせたい。

ページ	掲載の意図	活用方法
P.88～89 【色の世界】 日本の伝統色	○日本の伝統色の名称が、動植物などの自然に由来していること、季節の移ろいを感じ取りながら生まれたことなどを学習させるため、名称の由来とともに、季節ごとに整理して掲載した。	○教科書P.64～65「季節感のある暮らしを楽しむ」と関連させて、色の由来などを学習させることで、季節や自然を敏感に感じ取り、生活の中に取り入れてきた日本の美術文化の特徴を感じ取らせたい。
P.90～93 【日本美術史】 海を越えた文化交流	○日本の美術文化は、さまざまな国や地域との交流を通して発展し、育まれてきた。そうした文化交流の歴史や様相を学習するための資料として、仏像や絵画作品、現代の漫画やアニメーションなどを掲載した。	○「水墨画の流行」「ジャポニスム」「漫画とアニメーション」などのトピックは、題材と関連させて適宜紹介するとよいだろう。 ○修学旅行や社会科の学習などで仏像を鑑賞する機会があるものの、どのような観点で鑑賞すればよいかわからない生徒も多い。仏像のグループ分けや手の形、持ち物の意味など、教科書で示した観点を活用することで、その仏像に込めた人々の思いなどを感じ取らせることができる。
P.94～96 美術史年表	○日本および世界の美術の流れを示し、それぞれの時代に対応する美術作品を掲載している。作品を鑑賞する際、時代や様式といった大きな流れの中で作品を捉える視点をもたせるため、授業の中で適宜参照されたい。	○題材に掲載したものと同じ作品も掲載している。年表上のリンクを参照しながら、題材ページと関連させ、その作品がどんな時代にどんな流れの中で生まれたのか考えさせたい。
P.97～99 日本の伝統工芸	○全ての中学生に、自分の住んでいる地域の伝統工芸について関心をもたせたいと考え、47都道府県の工芸品を1点ずつ掲載した。また、独自の文化を育んできたアイヌと琉球の工芸品についても紹介している。	○身近な地域の伝統工芸に関心をもち、機会があれば実際に触れ、そのよさや美しさを体感させたい。自分の住んでいる地域との関わりの中で、伝統工芸について調べたり触れたりすることで、古くから技術を守り受け継いできた人々の思いを実感することができる。
P.100～101 日本の世界文化遺産	○日本の2018年時点の世界文化遺産18件を全て掲載した。人類共通の宝として遺跡や文化財、自然環境を大切にしていこうという、世界遺産の理念に触れ、美術作品や自然を守り受け継いでいく姿勢を育んでもらいたい。	○教科書では法隆寺五重塔を取り上げているが、現在の技術にも生かされている例がある。ただ歴史の遺産として学ばせるだけでなく、現代とのつながりを調べさせることで、守り受け継いできた文化の意味を実感的に理解させることができる。
P.102 地域と美術とのつながり	○地域と美術とのつながりを紹介するため、各地の芸術祭や、作家の滞在制作、小中学生による地域での作品展を紹介した。	○身近な地域でも、参加したり足を運んだりできるイベントやプロジェクトがないか、インターネットなどで調べさせたり、実際に足を運ばせたりさせたい。鑑賞するだけでなく、制作に関わったり、イベントに参加したりすることで、美術の豊かな広がりを実感させることができる。
P.103 美術の力	○美術のもつさまざまな力や働きの一部の例として、「国や言葉を超越する力」「個性を認める力」「見えないものを見えるようにする力」を紹介した。	○教科書では美術の三つの力を紹介しているが、それ以外にどんな力や働きがあるか、中学校美術での学びを振り返りながら考えさせたい。
終わりに P.104～105 うつくしい！	○中学校美術のしめくくりとして、谷川俊太郎の文「うつくしい！」とともに草間彌生の「南瓜」を掲載した。この作品を美しいと感じる人もいれば、そうでない人もいる。多様な価値観を認め合い、美術を通して学んだことなどに思いを馳せ、心豊かに未来へと歩んでほしいという願いを込めている。	○文と作品を鑑賞しながら、3年間の美術での学習を振り返らせたい。作品を鑑賞して感じた思いや、場所と作品の関係、どんなものが自分にとって美しいのかなど、さまざまな切り口を与えて、自分なりの美術に対する思いを言葉にするように促したい。